

近代建築史上の保険会社 第一世代の建築家 (3) 山口半六

第七回目の連載記事に、学食の「素うどん」に新入生の緊張感が現れているということを書いた。その後、大学生協の食堂には、「学食パス」というものがあることを知った。この6月より、ご縁があって本務校の大学生協に関わることになったこともあり、「学食パス」について調べて見た。

学食パスとは、SUICAやICOCAなどのカードのプリペイド機能を、学食用に利用したしくみである。親が、子供の新入学時に学食パスの手続きをすれば、学食でしか利用できない仕送りをすることができる。下宿をしている娘や息子がバランス良く食事をしているのかを心配する両親が多いことだろう。学食パスを利用した場合、学食でとった食事の栄養バランスがインターネットのマイページで閲覧することができる。学生は、自分の栄養バランスのチェックができ、両親も娘や息子の食生活の一部を知ることができる。

最近の学生は優しくなっていて、「出資者」である両親がチェックすることに対して強く抵抗を感じない学生が増えているようだ。むしろ「最近、緑のものが足りないね」とか母親からの電話があつたりして、親子の会話の話題になることもある。両親の介入を鬱陶しいと感じる学生の場合は、仕送りから自分でチャージすれば良い。ともあれ、「学食パス」によって学生が日々の食事について関心を持ち、健康で豊かな学生生活を送ってくれるようになれば嬉しい限りだ。

戦前の留学生は、海外でどのような食生活をおくったのだろうか。明治4年の岩倉使節団とともに多くの少年少女が海外留学をしている。7歳でアメリカに渡った津田梅子は、脂っこいものが苦手な野菜や淡泊なものを好んだとされているが、晩年、糖尿病で床に伏した(吉川利一『津田梅子』中公文庫、1990年)。若いころの食生活に問題があったのかもしれない。同じ使節団に松ヶ崎万長(まつかさき・つむなが)という13歳の少年がいた。彼は、ベルリン工科大学で建築を学び、明治17年に帰国した。帰国後、しばらくお雇い外国人のエンデとベックマンの下で働いたが、彼らの解雇とともに職をさり、台湾に渡って鉄道局に入って、駅舎や鉄道ホテルなどを設計して、大正10年に没している。当時の平均寿命からいえば若死とはいえないかもしれないが、50代はじめて亡くなっている。

戦前の日本の近代建築は、コンドルから辰野金吾というイギリス建築が主流だったが、第一世代の建築家の中でイギリス派から離れた人々も少なくない。当初のお雇い外国人がドイツ人のエンデとベックマンであったこともあり、妻木頼黄、渡辺護、河合浩蔵などがドイツ派と呼ばれた有力な建築家がいる。前述した松ヶ崎は、第一世代以前の建築家というべきであろう。最初から本場ドイツで建築を学んでおり、帰国後は日本語が話せなくて苦勞したと聞く。これに対して、妻木、渡辺、河合は、いずれもイギリス派から出発したが途中でそこから外れ、ドイツ等に留学して建築学を学んだ。河合は、第七回の連載記事で紹介したように、壮麗な愛国生命本社屋を設計したが、それは、ヴィクトリア風の赤レンガを特徴とする辰野式とは趣を異にしていた。

フランス派の代表的建築家は、片山東熊であろう。宮内庁に入庁後、宮家と家族の邸宅を中心に設計したが、赤坂離宮（M42）は彼の代表作である。山口半六も数少ないフランス派建築家である。彼は、明治9年に大学南校を卒業後、フランスに留学してパリ中央工学校で建築を学んだ。ここで第一世代の中では例外的に、行政色と市民色の濃い教育を受けたということである。（以上の記述は、藤森照信『日本の近代建築（上）』岩波新書、1993年に依拠。）

辰野金吾をはじめとする主流派の手がけた保険会社の社屋は数多いが、ドイツ派やフランス派の手による保険会社の社屋は少ない。私見のかぎりでは片山は保険会社の社屋に関与していない。しかし山口半六は日本火災の本社社屋を設計したという記録が残っている。この連載では、これまで私の所蔵する資料の画像を紹介してきたが、明治33年に竣工した本社の画像を所蔵しておらず、今回は、やむなく日本火災の社史から転載させていただいた（『日本火災海上保険株式会社七十年史』200頁）。

掲載した写真では、塔の先端が切れているが、「火災保険案内」の表紙は手書きだが全体の様子わかる。この建物は、大阪西区京町堀上通1丁目1番地に所在していた。社史によれば、「31年12月に着工し、33年2月新事務所は竣工した。新社屋は、日本銀行、日本生命、明治生命の社屋と並んで、当時大阪屈指の建物と称され、33年4月には2日間にわたり市内泉布観に1000人余の名士を招き、新築披露宴が行われた」（『日本火災海上保険株式会社百年史』43頁）という。このあたりの記述は、『七十年史』も『百年史』も変わりないが、ともに設計関係の情報について触れていない。

塔に威厳のある辰野式でもなく、また河合浩蔵の愛国生命のような重量感もない、質素な佇まいが感じられる。建築様式の専門家ではないので間違っているかもしれないが、これがフランス派によるものといわれればそれなりに納得できる。

藤森によれば、山口半六は、留学から帰国後、三菱社に入って働いた後、明治18年に文部省に入省し、病を得て明治25年に職を辞するまで文部省の建築家として腕をふるった。帝国大学理科大学（明治21年）、四高（明治22年）、第一高等中学校（明治23年）、東京音楽学校（明治23年）および五高（明治24年）などの建築を手がけている。日本火災の本社の設計は、彼が没する年の作品である。

2000年以降、損保業界の再編成によって、長い社名の会社や、アルファベットがたくさん並ぶような会社が増えてきたので、日本火災保険という名門損保の名前を忘れてしまいそうである。日本火災保険株式会社は、明治25年に大阪に設立された火災保険会社である。火災保険専営会社としては、東京火災および明治火災についてわが国で三番目に設立された会社といわれている。大阪の財界を中心に設立された会社であるが、明治39年に日本酒造火災を買収していた川崎財閥が同社と日本火災を合併し、川崎系の火災保険会社として生まれ変わった。その後、戦時期の官僚の指導による産業合理化の一環で、昭和19年に日本海上と合併し日本火災海上保険株式会社となる。同じ産業合理化の過程で、尼崎海上、辰馬海上、大北火災および神国海上の四社が合併し、興亜海上火災運送保険株式会社が設

立されていた。現在の日本興亜損害保険株式会社は、2001年に両社が合併したものである。

今年の9月1日に、日本興亜損保は、損保ジャパンと合併し、損保ジャパン日本興亜株式会社となると報道されている。損保ジャパンの前身会社は、日本で最初の火災保険会社である東京火災である。そのため、最初に設立された火保会社と三番目に設立された火保会社を前身会社とする二社が長い歴史を経て合併するという事になった。新社名が長い上に、ジャパンと日本が重複しているという批判もあるが、両社の長い伝統の中で培った特徴を活かし、グローバル企業として組織能力を高めていただきたい。



日本火災保険の本社営業所（明治33年竣工）



日本火災保険の火災保険案内